



2019.3  
第65号



一般社団法人  
大学女性協会  
東京支部会報

- TOMOSHIBI -  
Journal of Tokyo Chapter  
Japanese Association of  
University Women  
<http://www.jauw.org>

## 一年を振り返って

支部長 森川 淳子

2018年度東京支部では、本部の「教育・ジェンダー・共生―誰ひとり取り残さない共生社会を創るために―」というテーマに合わせた勉強会を2回開きました。（原発ゼロ・自然エネルギー推進について）「共生社会の実現を目指して―性的マイノリティの視点から―」知識としては理解しているつもりでも、実状はどうなのか、直接かかわっている人の話は大変参考になりました。また都庁見学も見学に行きそうで行かない所というところで、幸い天候にも恵まれ会員の親睦を兼ねて、楽しいものでした。

チャレンジ奨学事業では、発達障害児とその家族を支えたいという学生を選ぶことができました。支部国際奨学生も一人は3月で卒業します。来年度に新しい学生を募集します。ご推薦をお願いします。本部国内奨学生も東京支部から6人選ばれました。新春のついででは、若い未来の研究者の話を聞いて私たちも元気をもらいました。

今号の投稿特集「私の辞書に『今更』はない!」はいかがでしょう。多くの方からの投稿がありました。JAUWの会員は元気です。まだまだやりたい事が沢山あります。伝えたい事が沢山あります。引っ込んではいられない!

今年度に入りいくつかの支部から廃

部・休部のお申し出がありました。支部担当理事として、電話訪ねて行き、現状をお聞きしました。会員・実働会員の減少、高齢化など、理由はそれぞれですが、今後も全国的に問題になってくるのが考えられます。幸い今回は継続してくださること



増山翔子さんにチャレンジ奨学金を贈呈

になりました。2019年度の会員総会では、京都支部で各支部へアンケートを取り、支部活動についてみんなで考えるところです。東京支部でも他人事ではありません。現在支部会員の約半数が70歳以上です。若手が入れなければ、東京支部委員会もそうですし、本部理事会、委員会も成り立たなくなります。会員増強に皆さまのお力を借りしたいと思います。

2019年の支部総会の3部では、若い頃に誰もが、本で、映画で、舞台で一度は感動したことがある『風と共に去りぬ』を翻訳した荒このみ氏に講演をお願いしました。お誘い合わせの上、ご出席くださいますようお願いしております。

## 東京支部総会のご案内

2019 4月6日(土) 11:00-15:30

会場：グランドプリンスホテル新高輪 B3「イルレオーネ」  
懇親会費：5,000円(東京支部会員は4,500円)

- 第1部 東京支部総会議事(11:00-)
- 第2部 懇親会・会食(12:30-) ランチでご歓談
- 第3部 講演会(14:00-)

### 『風と共に去りぬ』における女の生きかた

講師 荒このみ氏 (東京外国語大学名誉教授)

プロフィール▶1946年生まれ。東京外国語大学名誉教授・博士(文学)。お茶の水女子大学文教育学部卒業、東京大学大学院博士課程修了。中央大学・津田塾大学・東京外国語大学で教鞭をとる。アメリカ文学・文化専攻。著書『マルコムX』『アフリカン・アメリカン文学論』『歌姫あるいは闘士 ジョセフィン・ベーカー』など。訳書シルコウ著『儀式』ミツチエ著『風と共に去りぬ』など。ノーベル文学賞作家トニ・モリスンをはじめ、ラルフ・エリスンなどアフリカン・アメリカン作家を研究。文学を通してアメリカ社会を解釈する。



杖つけば  
人みな優し  
春隣



加藤恭子著『米寿のあそび』より

●お席は自由です。  
●懇親会・講演会に  
支部会員以外の方  
ご参加大歓迎!

## 投稿特集

# ♪ 私の辞書に『今更』はない!

探求心旺盛な会員の皆様からの投稿「『今更』はない!」を、と一緒に体験しませんか?  
心の若々しさに触れて、きっと勇気と元気と刺激をわけてもらえることでしょう。  
次は、あなたの投稿の番です。

## 夢は「アヴィニオンの 皇帝の庭の舞台」で

佐伯邦子(70代)

平成18年3月、65歳で43年間心血を注いで全力投球で頑張った教師の職を無事に定年退職した。大学卒業後、夢中で過ごした43年間だった。

さて、これからは自由な自分だけの時間。何を始めようかと日々模索中、自分が成長の過程で一番好きだったことは何だったか色々考えてみた。そして、ふと思いついたのが小学校一年生の時に疎開先の小さな学校の体育館の舞台で学芸会の独唱をしたことだった。

学級から一人選ばれ「りんごのひとりごと」を歌った。

私は真赤なりんごです

お国は寒い北の国

りんご畑の晴れた日に

箱に詰められ汽車ぼっば

街の市場につきました

りんごりんごりんご

りんご可愛いひとりごと

暗記した3番までを全部無事歌い終わったときのあの大きな拍手と達成感は一生涯忘れない思い出である。

あの頃は本当に歌うのが好きだったなあ。「そうだ。声楽をやるう」と思い立ち一念発起。JAUWで仲の良かった川上弘子さんの紹介で、彼女のお嬢さんの家庭教師だった斎藤先生の門をた

たき、あれからずっと続けている。東京では声楽の個人レッスンを毎週1回、コーラスを毎月2回、続けている。

そして、秋田のアトリオンホール、東京の内幸町ホール、紀尾井町のサロンホールや日経ホールの舞台で、ソロも経験させていただいた。現在練習に通っているのは三番町の山岡先生(個人レッスン)と六番町の堀先生(コーラス)で、お二人とも国立音楽大学声楽科のご出身であり、本格派の現役ソプラノ歌手で二期会に所属されている。

私の辞書に「今更」という言葉がないのであれば、いつかフランスの「アヴィニオンの皇帝の庭の舞台」で歌ってみたい。

昨今は「この世に生まれて、まあまあ良く出来たほうの人生だったかな?」と感謝しつつ、自分がそこで歌っている姿を想像して、一番好きな曲を口ずさみながらわが人生を旅立ちたいものだと思っている。



紀尾井町サロンホールにて (2018年12月15日)

## 退職後、博士論文に挑戦!

長谷川瑞穂(70代)

修士号取得後、大学で教えておりましたが、退職後、博士論文に挑戦したいと思い、一念発起! 東京外国語大学の博士後期課程の1年目に必要12単位を取得し、2年目はいよいよフィールド調査。博士論文はマイノリティの言語保持に関するもので「カナダ・ヌナブト準州の社会変化と教育—イカルイトでの事例研究を中心に—」です。半年がかりで現地調査に必要なライセンスを取得し(日本人で二人目)、2016年9月に北極に近いヌナブト準州都イカルイトで調査を行いました。

世界の言語は過去500年で半数が消滅し、次の100年でさらに半数が消滅の危機にあるとされています。言語は文化遺産であり、民族のアイデンティティの象徴でもあり、言語や文化の保持は重要です。イヌイットが85%のヌナブト準州創設(1999年)後16年を経た時期のイヌイット語の状況を個別アンケート調査、インタビュー調査、参与観察で調べました。1960年代までは、教会運営の寄宿学校、連邦政府の学校でイヌイット語の使用は禁じられ、英語への同化教育でしたが、1969年より、イヌイット語と英語のバイリンガル教育が徐々に行



われてきました。しかしながら2016年現在、筆者の調査結果では、イヌイット語の家庭での使用率、イヌイット語の運用能力とも20年前と比して半減し、特に若者の英語化が進んでいます。要因として、英語は威信言語であること、バイリンガル教育は早期移行型であること、貧困、過去のトラウマなどイヌイット社会に問題があること、多文化主義に潜む白人優位性などが考えられます。今後の方向としては、イヌイットはバイリンガル、バイカルチュラルになるべきであると考えます。

以上のような内容の博士論文を提出し、最短の3年で、2018年3月に東京外国語大学より博士の学位が授与されました。

新会員ですが、お役に立てることがあれば……と考えておりますので、今後ともよろしくお願い致します。

## 新しい展開を楽しむに

宮島茂子(80代)

一昨年のJAUWの総会の時、久しぶりにお会いした井口美登利さんのお隣に坐りました。少しお痩せになったなあと思いましたが、「宮島さん、80を超えるのも大変だけれど85を超えるのはもっ

と大変なのよ」とおっしゃいました。お亡くなりになったと聞いた時、その時のことを思い出しました。

今まであまり年取ったと思うことはなかったのですが、夫が2年前に逝き、6月に86才になった時、井口さんのことを思い出し妙に年取ったことを意識するようになりました。これから生きて行く自分の在り方も考えたのでした。

よく「寝たきりにならないためには、毎日歩かなければ」ということを耳にし、実際毎朝早く起きて1時間位歩くという年上の方に会います。何か故障があっても愚痴をこぼさず、とても明るいのです。

私は目的地なく歩くことができないので、何か目的をもって歩くことにし、近くの「ゆうゆう館」「公民館的なもの」にチャンスを求め、2つの高齢者向けの体操グループに加わることにしました。それと喉を鍛えるために、歌のグループにも入り、月2回大きな声で楽しく歌っています。メンバーは皆高齢で男性も5人くらいおり、椅子に腰かけたまま歌う人もいて、今までにないコーラス(?)を経験しています。先日はお揃いのスポーツシャツを着て、老人ホームでも歌いました。

40年程前に北九州で始めたグループでの英語の講読も月2回続けていて、杖をついて表参道まで行っていますが、単語もすぐに忘れ、止めようか

という気持ちをつるいたたせるのが大変です。

長い間仕事のため留守にし、この地域に知り合いもなかったのですが、この年になって今までと雰囲気の違いが友だちができたことも何よりの喜びになっています。また新しい展開が楽しみな今日この頃です。

## 傘寿を迎えようとして、 「今更」

武内道子(70代)

明けて79歳になるわたしのころにこの2、3年住み続けている思いは「アメリカ移住」である。移住といっても、アメリカはダラスの大学で教鞭をとる息子の家族のもとで生活するということである。年取って一人暮らしだから息子一家と一緒に住むという、よくある人生の終焉パターンなのだが、海の方この地ということでは誰もが「えっ!」と発し、次に「旅行じゃなくて?」とか「今までよりもっと頻繁に?」長逗留?、挙句の果ては「何も移住しなくても、行ったり来たりすればいいじゃない」と論じてくださる。

公共の乗り物は一切ない、といっていい。車の運転はもとより自転車さえ乗れない私が(自転車は乗れても役に

立たないが)暮らせるわけがないと友人たちが口をそろえて言う。ましてや、人前で話すことを生業とし、人と交わることによって癒され、元氣を得てきた私であるから彼らの危惧もわかる。いや、私自身もそういわれると自信がなくなる。

でも私は行こうとしている。物理的にも、精神的にも私は一人での生活が維持できないかと思いついてもう4、5年になる。研究はどこにいても、今の時世でできるだろう。日本の人とのやり取りも今のご時世難しいことではない。好きな連句でさえメールでやっている人は多いと聞く。一人で出かけたときはウーバーを使えばいい。料理をして、誰かと一緒に食べる幸せをもう少し頻繁にもちたいという願いもかなえられるかもしれない。主人に逝かれてから教え子をはじめ訪れてくれる人は多いとはいえ日常的営みの中に入っていない。要は、一番必要なことはこれからの人生、自分が何をやりたいかはっきりしていることである。嫁も息子もはつきり言うてくれる、私のしたいことにはどんな協力もする、と。

トランプ政権下、目下移民局が閉じていて私のチャレンジは宙に浮いている。いつオープンして移民ビザが下りてもいいよう、新しい年は借家住まいをクローズするべくせつせと片付ける年になるだろう。

## 「明治大学技術士会」の 初代会長就任

東山セツ子(80代)

2016年10月、「80歳の誕生日を迎えたので、所属団体の数を減らしたい」と考えた一週間後のこと、明大卒

男子の技術士5人の来宅者あり。『明治大学技術士会』を設立するので、その初代会長を引き受けて欲しい」とのこと。男子の中からではなく、何故か私(文学研究科修了。技術士部門は応用理学部門)がその標的となった模様。この国家資格は理系のものであり、全部門で数万人。文系出身者は元々少人数で、さらに女子は少数。女性技術士の会(初代会長を務めました)では、一割を目指しています。登録は性別を記さないで女子の人数は定かではありません。氏名で判断するので、やや不明確。女子としての登録は6人目です。現在(公社)日本技術士会の名誉会員ですが、男子約300名で、女子は他にはいないというのが現状です。

明治大学技術士会では講演会及び見学会を各々年1回開催しました。講演会のテーマは今のところ電気電子の専門分野のものです。幹事10余名の大半が工学部(電気電子学科)の出身であるからでしょう。

見学先は第1回「東京未来科学館」

(川崎)、第2回「明治大学平和教育研究所資料館」(生田キャンパス)でした。講演会、見学会は会員外の方の参加歓迎です。

なお、明治大学出身勤務者の技術士の方、明治大学技術士会へどうぞご加入ください。

明治大学技術士会(会員60余名)は大学技術士会連絡協議会32団体の中、理事校(10校)の中の1校としての役を担っています。

その他の役割としては、(一財)全国建設研修センター理事、(公社)日本技術士会名誉会長、(一社)桜蔭会代議員などです。

## わたし、はじめて ピアノの発表会にできました

藤村久美子(70代)

「発表会に出ることは絶対お断りします」と2005年に近くのカルチャーセンターでピアノを習い始めた時に、先生に宣言した。少し前に父親が亡くなり、同時に職場で新たな責任を担うことになり、気分転換のために何か集中できる新しいチャレンジに取り組みうと思いい、40年ぶりにピアノレッスンを再開することにしたのだ。同時に、日々大学生の教育指導を行なう中で厳しく注意したり叱ったりしている私が学習

者の立場に立って逆に先生からの厳しい指導を体験することも良いかなと考えた。しかし、発表会で演奏するために必要な練習時間を確保するのは無理だと思った。20歳年下の先生が「練習できてなくてもレッスンを受けに来てこの場で練習したらいいですよ」と理解を示してくださったおかげで、諦めず14年間続けてきた。

「発表会には出ない」と決めつけていた私がレッスン開始13年目、70歳で参加することにしたきっかけは退職後に始めたボランティア活動の仲間の一言だった。同じところでピアノを習って以前から発表会に参加している同い年の男性が「藤村さんも一緒に参加しましょうよ」と言ったのだ。もう仕事はしていないので、練習に充てられる時間はあるからやってみようと決心した。

曲選びに少し迷った結果、ジャズにアレンジした「煙が目にしみる」に決めた。おまけに、ドラムの先生が伴奏してくださることもなった。「いくら練習を重ねても、舞台上上がるとほとんどの生徒、特に大人は、緊張して間違いをする。それを覚悟し、普段の7割の力が出せたら十分だ」という気持ちで臨んだらいいですよ」という先生の言葉を聞いて、当日はかなりリラックスした気持ちで弾けたが、やはりミスは避けられなかった！にも関わらず、実に楽しい体験ができて、終

了後はドラムの先生に「来年も伴奏してくださいね」とお願いまでした。

人間みんな様々な潜在能力を持っていると信じている私は、今後も色々なことに挑戦し、「隠れた」才能を少しでも引き出し開花させることを目指したい。

## 本を作りました

加藤恭子(80代)

2歳年上の友人が88才となり米寿の記念にとエッセイ集を作成しました。その友人に勧められ、それでは私もなにかをと考えましたが、残念ながらこれといって得意なものはありません。それで俳句、俳画、エッセイを一つにまとめて米寿を迎えた節目に、ささやかな作品『米寿のあそび』を作成することにしました。

俳句はJAUW東京支部の中に平成8年柴崎富子会員の指導のもと「楽しい俳句会」が誕生しました。季語も知らない全くの初心者私が俳句にふれた始めでした。以来グループでEメール上で俳句を交換しています。なお、柴崎ご夫妻の「虹の会」を経て俳句「海」の会に入会し現在に至っています。

俳画はたまたま知ったカルチャーセンターの教室で手ほどきを受けました。



エッセイは東京支部が先の大東亜戦争を身をもって経験した会員の記録を残そうと、平成27年『あの頃わたしは』という冊子を発行しましたが、その中の私の文章を載せてはどうかということになり、それでは他にいくつかのエッセイを書こうということで、思いつくままに16の文章が書けました。『あの頃わたしは』の中に、ゲートルを巻き「神風」の鉢巻をして工場で働いたと書きました。今その鉢巻が縁あつて昭和館に「戦中の学童・学徒」として5月末まで展示されています。

表紙はこの本ができる予定の夏にふさわしく、鷗が波に戯れる俳画を使つて涼しげな185ページのの本が出来上がりました。



この本を作るのに一年かかりました。俳句、俳画、エッセイをまとめる過程において、このようなものを作ることは私にとつておこがましいことではないかと幾度か逡巡の思いにかられましたが、お手伝いくださった方に励まされて作り上げることができました。あれから一年半経ちますが、本を見ると、よくまあここまで作り上げたものだと思えます。ページを繰ってみると、その時々々の生活、家族、旅行などが思い出され、これは自分の人生の記録でもあり、自分史のようでもあります。

と思うようになりました。皆さんも書いてみてはいかがでしょうか。意外と筆が進みます。

## 脳が目覚める 難解ナンプレに挑戦！

阿部幸子(80代)

私はもともとパズルが好きで、問題集を買つてやるほどではないものの、新聞の日曜版の間違い探しや、雑誌のクロスワードパズルなどを楽しみにしていたこともあった。今は数独、ナンプレ(ナンバープレート)と言われるパズルにハマっている。3×3のブロックに区切られた9×9の正方形の枠内に1～9までの数字を入れるお馴染みのパズルで、以前は電車の中でも熱中している人を多く見かけたものだった。私が初めてこの問題集を買ったのは、10年ほど昔、米国への一人旅の途中のことだった。サンフランシスコ空港で国内線への乗り継ぎの待ち時間を少し持て余していた時、気がつくとなんか座っているほぼ全員がこのパズルに熱中しているではないか。空港の本屋には数独の本が山積みされ、バーゲンセール中だったので、とりあえず1冊を購入した。初めて試みたが数日のアメリカ滞在には、1問も解くことはできなかった。帰国後しばらくしてか

ら思い出して再び問題にとりかかった。何としたことか、簡単に数字が埋まり、面白さを発見した。とは言え忙しい日々では長続きせず、時折思い出したように手に取っていたが、それでもいつの間にか1冊をクリアしていた。3年前には上級者以上、難解ナンプレという専門誌を購入、一年に何回か集中して取り組むうちに、今年の年末には難問、超難問、神難問併せて254問を完全制覇した。八十路半ばを過ぎたが、これからの脳トレにはさらに難問に挑戦してみたい。

## 「少女時代の夢」はどうなった？

百束礼子(80代)

中学時代の作文に、「将来、世界一周旅行をしたい」と書いていたのを鮮明に記憶しています。終戦後の生活苦の続く中、どうしてそのような破天荒なことを考えていたのでしょうか。

やがて、戦後の日本人の勤勉さと努力の甲斐あつて、経済の復興目覚ましく、海外へ出掛けることも気楽にできるようになってきました。

向こう見ずな好奇心に誘われ、予約不可能な航空券を持つて、着いた先でホテルを探し、次の行く先を決めるといふ無計画な旅もしました。帰途、空港

に行き、最終便まで待っても、「空席なし」で、一人トボトボとホテルに戻ったこともありました。(ホテルを出る時には念のため、もしかしたら、戻ってくるかもと言ひ残しておいて)

このような旅なので、私の場合は、何かテーマを持つて調べるとか、研究するとかというものは全く違い、知らない土地に行つてみたいという、ただそれだけの非生産的なもので、自己満足の世界です。

イヴォ・アンドリッチの『ドリナの橋』を読んで、16世紀から20世紀にかけて民族の争いに曝されたこの橋を是非見たいと思ひ、バルカン旅行の途中の休憩時間に、大急ぎで走つて橋を向こう岸まで渡り、往時を偲びました。

また、トル・ハイエルダールの『ク・アク』で、絶海の孤島での、かつての人々の特異な生活を知り、イースター島を訪れたのは20年前のことでした。アスンシオンでは、中学時代の同級生と卒業以来60年ぶりの再会を果たし、もう日本に帰ることはないという彼とは、60年ぶりの再会が永遠の別れとなりました。

ささやかな旅の記録を眺めると、訪れた国は140カ国あまり。もうこれで最後と思つていましたが、今回、『今更』はないというテーマをいいただき、今少し頑張つてみようかなと思うこの頃です。

## 晩学の源氏物語

山崎邦子(80代)

源氏物語に憧れを抱いて、いつの日にか読みたいと思ったのは、少女時代のことでした。それから何十年も経って、その機会が訪れたのは75歳の時。晩学も最たるものでお恥ずかしい限りですが、それ以来可能な限り出席して源氏物語を聴講しています。

源氏物語を知り尽くした講師の導きがなければとても叶わなかったことです。読み進むにつれ、この壮大な物語の虜になりました。紫式部という稀有の才能をもったストーリーテラーの繰り出す物語は、それぞれ個性的な登場人物、用意周到な会話、現代人にも納得の心理描写に彩られており、飽くことがありません。

源氏物語は千年も前に書かれ今なお人を魅了してやまないのは、そこに人間の真実が書き込まれているからでしょう。

お教室では一章ごとに質疑応答や感想を述べあうこともあり、理解に役立っていますし、楽しい時間です。全巻読み終わるまでまだまだ時間がかかりますが、人生最後にきて、我が国が世界に誇る名作に触れたことに満足しております。

## 吊るし雛との出会いから

鷺崎千春(70代)

静岡に移り住んで間もなく「手作りグループの吊るし雛展、見に来ない？」と誘われました。這い這い人形、姉さま人形、手毬、宝袋、草履、お花や果物、犬張り子など、50個もの可愛い飾りが7本の糸にさがっています。女の子の健やかな成長を願って、昔はおばあちゃんが有り合わせの古布で作ったと言われています。一つ一つ、古布の柄と色合わせがすばらしく、特にちりめんの赤が効いて、私も作ってみたいと思いました。

家の押し入れを探すと、母たちの着物の端切れがたくさん出てきました。『弓岡勝美の手芸図鑑ちりめんとつり雛』(日本ヴォーグ社)を教えていただき、型紙を写し、できるだけお手本通りに色柄を合わせました。ぴったりの布が決まったときの嬉しいこと、あとはちくちく一針ずつ返し縫いで仕上げます。3年半ほどかかりましたが、親の介護をしながら楽しい自分の時間が持てました。

吊るし雛に合わせて気に入ったお雛様を飾りたいと人形店に通ううちに、今上天皇のご成婚のお姿に倣ったという「黄櫨染」のお雛様に出会いました。

大安の日を選んでお店の方二人が、大事に抱えてお持ちくださったのに感激しました。

そろそろ身の回りを片付けなくてはならないときに、また漆のきれいなミニチュアのお琴や琵琶、横笛、笙の笛などのお道具が目に残って……。そして今年は、脇飾りの市松人形探し、京都から届いたという市松さん、愛らしいお顔も衣装の細かな刺繍もこれなら満足、私の雛遊びの仕上げです。これからも、毎年春が来るのを待ちかねてお雛様を飾ります。



## 脳トレ麻雀!

木村和子(70代)

「ロン!」普段より些か興奮気味の発声に、他の三人は「えっ?」という落胆ムード。麻雀を私が始めたのは、母亡きあと、17年もひとり暮らしをしてきた父が、囲碁 将棋 麻雀という一人でも仲間とでも集中して楽しめる趣味を持ち、新聞、雑誌から自分の一手を分析し向上を目指す姿に、大きな安堵を覚えた事がきっかけでした。

スポーツジムで水泳、筋トレを永年続けていますが、父を見送った後、70歳を前に脳トレとして麻雀を選び、区民対象の教室でプロに学びました。麻雀といえば、ギャンブルのイメージがありますが、囲碁や将棋と同じようにゲームを楽しむものとして、競い合いをする競技としての麻雀も楽しみの要素の一つです。自分があがりとなり、「ロン!」と発声したり、メンバーとの攻防で、脳が活性化し、集中力も高まり、牌を揃えること、相手の牌を予想すること、手先を使って牌を並べたりの動きが、脳を刺激するという、プロの講座で興味が深まりました。最近では一人でもAIソフトで腕を磨いています。現在も、古くからの大学女性協会のメンバーとも、緊迫? しつつ、和氣藹々と卓を囲んで楽しんでいます。



## ゴルフで全国大会へ！

植松ちどり(60代)

45歳の時、病に伏した父から分不相応なゴルフ場のメンバーシップを譲り受けた。

全くクラブを握った事のない初心者が、一人でゴルフ場に通い、5回目にくでたくハンディキャップ36をもらい、クラブ競技デビューとなった。

あれから20年。

10年間はただゴルフ場に行っているだけ。

弾みで優勝してまぐれで貰った33のハンディのまま。

それが50代半ばあたり、そろそろ何とかしなくてはもう時間がないのでは？と焦り始め、本格的にプロについて猛練習を開始した。

還暦の記念にとハンディキャップ付きの公式試合に出たのが、予選を通過、なんと関東決勝に出場できた。

それから〇〇年。

予選落ちは1回のみ、必ず関東決勝に辿り着くという強運にも恵まれて、ついに全国大会にまで出場。家族をはじめ周囲はびっくりしたりあきれ返ったりしていた。

全国大会では勢い余り、乗り慣れないカートに頭をぶつけ、陥没骨折も気が付かず夢中になってプレイしたが、後ろから数えたほうが早い成績に終わった。それでも、確かに全国大会に出場は事実。

しかし去年は予選落ち。しばらく落ちこんでいた。

友人たちは言う「1回出たのだから、もういいんじゃないの？今更無理しないでのんびりやりましょうよ」「今更この年で何言っているの」

何をおっしゃる!?

私の辞書に今更はない!!

今年もまた頑張る!

また全国に行く!!

最高齢の出場者になります!!

と新年早々誓ったのであります。

ゴルフと人生は(多分)これからが面白い(ような気がする)。

## メール俳句101号

坂上栄美子(70代)

平成8年に支部のサークルとして、当時委員だった柴崎富子さんを講師に「楽しい俳句会」がスタートした。10名ほどの参加者は全員が初心者で、季

重なりや漢字の誤記があったりして、柴崎先生によく叱られた。「これは事実を575で書いただけでしょ。俳句はボエムでなければならぬのよ」と言われても、ひたすら指を折って575に音を整えるのが精一杯だったが、だんだん句作の面白さにのめりこんでいった。先生は、十数年で病気のため辞められることになり、この会も解散した。

その頃には、メンバーも、他の結社に入会できるように育っていて、自分の句風と合う結社をそれぞれ見つけて入会し今日に至っている。解散した当時、「解散しても、これからはお互いに俳句を交換する機会を持ちましょう」ということで、「メール俳句」を立ち上げた。

月末までに各自の今月の3句を、私までメールで送ってもらい、全員の句を整理してまとめ、月初めには全員にメールで返送する。時には、他の句会で受賞したニュースや、同人になったという嬉しい報告も入る。毎月句が届くと、その人のその1カ月の生活も垣間見える。旅行のこと、老親や子や孫のこと、誕生日のこと、また病気や怪我のこと、平和への熱い思いなどなど、誰も若いたとは言えない日々のなか、老いを愚痴らず病身を嘆かず、なかなか会えないけれど、お互いを気遣いながらの交流が続いている。2月には100号となり、2千句をゆうに超えた。

ただ、途中であの方の方が音信不通になっていったのは、切ない。

思えば、俳句は自分を客観視しなければ作れない。複雑な日々の感情を整理する妙薬のような気もする。駄句で恐縮だが、前を歩く夫の老いをつい咎めたくなくても、一呼吸おいて、「夫の背の老いは言ふまい星月夜」とすると、なんだか私も優しい人のような気がします。夫も傷つけずにすむ。

3月からは101号を再出発点として、7人全員揃って200号を手にしよう。そう、恭子さんにあやかっで、米寿には句集を出そう。

## メール俳句七人一句

青年の数珠新しき小春寺

岩田玲子

実梅落ち寺の静寂深まりぬ

加藤恭子

多摩川のひかりを分けて初電車

小池とも子

「よう効きます」ぼっくり寺の日永かな

坂上栄美子

予報士の「春はすぐそこ」ほつと笑む

野瀬久美子

卯呑み松の木登る蜷かな

端本和子

人力車止めて講釈花の下

山崎邦子

SPECIALIST  
COLUMN

## 糖尿病のはなし

— 後編 —

藤川眞理子

## 糖尿病を引き起こす原因

要因は遺伝因子と環境因子です。(遺伝因子)としては、日本人はもともインスリンの分泌能力が低いこと、肥満した糖尿病の多い家族など、(環境因子)は食事(高脂肪食)や運動不足などがあげられます。

第二次世界大戦後、魚より肉、高脂肪食など食生活の欧米化が進みました。遺伝因子が同じでも日系三世のアメリカ人では糖尿病有病率が日本人の二倍であることから要因であることがわかりました。また低栄養でやせた妊婦から産まれた児は後年、糖尿病になりやすいことも第二次世界大戦中の「オランダ飢餓事件」で示されています。やせ過ぎ低栄養の妊婦は心配です。

## 糖尿病はなぜ怖い？

「しめじ」、「えのき」、「はこがに」、これは鍋ものの具材ではなく(糖尿病合併症)の覚え方です。糖尿病に特有の細小血管障害による糖尿病神経障害(し)、糖尿病網膜症(め)、糖尿病性腎症(じ)、大きな血管の障害による壊疽(え)、脳血管障害(の)、心筋梗塞や狭心症などの虚血性心疾患(き)、と歯周病(は)、骨粗しょう症(こ)、

がん(が)、認知症(に)です。

糖尿病と診断されて治療せずに放置すると、無症状のまま進行し必ず合併症を発症します。糖尿病高齢者ではフレイル(加齢による虚弱)も心配です。

糖尿病患者の最大の死因は、大腸がん、肝臓がん、膵臓がん、子宮がんなどのがんです。また、認知症や寝たきりの原因になる骨粗しょう症にも糖尿病患者さんはかかりやすいのです。

## 糖尿病性腎症

糖尿病性腎症は人工透析を受ける最大の原因疾患です。透析医療費は1人年間500万円ほどにもなります。

現在、透析患者は32万人で医療費は1・6兆円。国の医療費40兆円(2015年)の5%を占めます。日本では総て公費負担なので、医療経済を脅かしています。糖尿病性腎症による人工透析患者は2025年まで増加し続けると予測されています。

このため国は、「糖尿病性腎症重症化予防プログラム」を策定、健診で糖尿病性早期腎症や腎症を抽出して受診勧奨し、かかりつけ医と保険者の連携で、保健指導により透析治療が必要なレベルに進行しないようにしようという取り組みです。

糖尿病患者は治療中断予備群そのものです。無症状の間は治療の必要性を感じないので放置してしまい、症状が出てきた頃には人工透析を導入するしか手段がないということも多い残酷な病気でもあります。

糖尿病で高血圧症が合併してくると、腎障害が起きていないかチェックが必要。尿検査で蛋白尿

(+)レベル、アルブミン尿陽性のレベルの糖尿病早期腎症であれば、良好な血糖コントロールと血圧コントロールにより腎症の進行にブレーキをかけられます。▼食事では減塩と質の良いタンパク質を摂ることがポイントです。

## 発症予防・合併症進展予防

発症予防はバランスの良い食事と適度な運動、禁煙です。ちなみに糖尿病患者の喫煙は動脈硬化、がん、心筋梗塞、脳梗塞のリスクを高めるアクセルであり、自殺行為。肥満の糖尿病が家族にいる方は太らないことが発症予防です。

▼食事について、血糖値を上げにくい食べ方として知られているベジタブルファーストに対して、タンパク質ファーストの方が血糖値をあげないという研究報告も出てきました。とにかく炭水化物は最後に食べます。ナッツなどの油脂類は血糖値をあげませんが、食べ過ぎて、高カロリーで肥満を助長するようでは、インスリンの効きを悪くするので逆効果。糖質制限は肥満糖尿病が理想体重に近づくまでは、おすすめです。タンパク質、脂質、糖質(炭水化物)をバランスよく食べることがポイントです。

最近では、人工甘味料は血糖値は上昇させないが腸内細菌叢を乱し糖尿病発症を来すという報告があります。ビールテイスト飲料も人工甘味料を使っていないものがおすすです。炭水化物から食物繊維を除いたものを糖質と言いますが、食物繊維は血糖値の上昇を抑える効果があります。食物繊維の多い食品を上手に摂ることも予防、食事療法のポイントです。食事療法、運動療法、と必要に応

じた的確な薬物療法により良好な血糖コントロールが得られれば合併症の発症は阻止できるのです。

## かかりつけ医の見分けかた

合併症予防するためには、血糖コントロールをHbA1c 7%以下に維持することがポイント。糖尿病と診断されたら「かかりつけ医」を決めて受診を中断しないことです。

「良いかかりつけ医の見分けかたを教えてほしい」と、よく相談を受けます。日本糖尿病協会の「糖尿病連携手帳」に検査結果などを記入し、初診時に眼科受診の紹介状を作成してくれる先生ならまず安心です。糖尿病網膜症は成人失明の主要原因だからです。

糖尿病の薬物療法はすばらしく進化しています。生活習慣のアドバイスを守り、的確な薬剤の内服により良好な血糖コントロールを得られれば一病息災です。糖尿病患者さんの健康寿命は、かかりつけ医によって左右されると言っても良いと思います。

## 最後に

糖尿病のご家族や友達がいいたら、かかりつけ医を決め継続受診しているか(中断していないか)、禁煙しているか、合併症は大丈夫か(「しめじ、えのき、はこがに」確認してさしあげてください。ただし、さりげなく！)

●ふじかわまりこ(東京支部会員) 日本糖尿病学会専門医・研修指導医。千葉県市原保健所所長

JAUW科学研究奨励委員会主催  
東京支部共催  
《第17回自然科学講演会》

## データと

血流シミュレーションが  
拓く予測医療の最前線

●講師 大島まり教授  
(東京大学大学院情報学環・東京大学生産技術研究所)

今回の講師 大島まり様(会員)は、16年前にも守田科学研究奨励賞受賞者として、記念講演をしてくださいました。当時も現在も流体力学の応用を得意技とされ、爾来、原子力から医療へと対象分野を先見的に選択し、世界的活動をしていらっしゃる。講演内容についてはJAUW会報最新号のご報告(b y 田島委員)をお読みくださいませ。

大島先生には、常々ありがたく思っておりました事があります。日本の子ども達の保育園や学校にかねがね深い関心を抱かれ、大学生はもちろん、近年は中高生とも、産業界等での体験学習を実践なさっていることです。

JAUWには、毎年6月にも守田科学研究奨励賞の受賞者記念講演を聴く機会があります。新しい情報伝達技術のおかげで、文系の理系のと隔てずに、誰もが自然科学の話を、自分なりに楽しめる時代になりました。年2回の現代人としてのセンス磨きを、何歳までも持続できれば幸いです。

(科学研究奨励委員)

ときえだひろこ



昭和二十年八月十五日

シリーズ  
あの頃は  
わたしは  
少女たちの  
戦争証言

## 戦後の日々 その2

児林 英子

(64号からの続き)

「守ち<sup>まも</sup>ちゃんが戻った」と言う声で外に飛び出してみると、近所の家に大きな背囊を担いだ兵隊さんが帰って来ました。復員が始まったのです。ある日、我が家にも兵隊さんが来ました。その時一人で家に居た私の目に、トランクに書いてある左右という字が映りました。新潟県高田連隊に駐留していた時、その地の人と自由結婚をした廉で勘当されていた左右吉おじさん? (私の大叔父)と直感しました。南方戦線で終戦を迎え、門司に上陸し、実家には出入り禁止になっていたことも忘れて故郷を目指して帰ってこられたのでしょうか。東京に帰れると、東京裁判(極東国際軍事裁判)で公職追放(戦後の民主化政策の一つとしてGHQ-General Headquarters-)の覚書に基づき、政財界・言論界・軍国主義等指導的地位にある人は追放された)になり苦労されたそうです。

食糧事情は戦時中より悪化し、鉄道草・野蒜・薩摩芋の蔓も食卓にのびました。幸い、牡蠣や浅蜆に恵まれ、山を開墾して

野菜も出来るようになりました。学校へはお弁当を持って通いましたが、お昼になると必ず校庭へ出ていく子がクラスに4、5人居ました。今考えると、お弁当が持たせてもらえなかったのでしょうか。そして給食が始まりました。今のようには御馳走ではありませんでした。

呉には連合軍が駐屯し、海田には、まばこ兵舎(建物の型が蒲鉾が建ち並びました。スコットランドの兵隊はスカートをはいっていました。「男がスカートをはいて、いけないんだ」と思いました。

その頃、母と二人で見た忘れられない光景があります。連合軍のトラックが広島駅前によつて来て駐車すると、車上から兵士達が、サンドイッチを作った後のパンの耳を、鯉に餌をやる様にパツと投げます。と、それを目指して、あたりに屯していた大勢の孤児達が群がります。私も白いパンは欲しかったのですが、母が手を捕まえて行かせません。その代りに、戦後逸早く出来た広島駅前の闇市で、シュウクリームを一つ買ってもらいました。経木(木材を紙のように薄く削ったもの)に包んでありました。

巷には並木路子の「リンゴの唄」、笠置シズ子の「東京ブギウギ」が流れ、ラジオでは「尋ね人の時間」(第二次世界大戦の混乱で、離ればなれになった人、消息不明になった人を尋ねる番組)、「街頭録音」(人々が自由にものが言えるようになった証拠)が放送されていました。マッカーサー、MP、PTAなどが日常語として加わりました。



傍聴席から臨む本会議場

### 都庁見学会報告

或る日、比治山に出来たABC(原爆傷害調査委員会・Atomic Bomb Casualty Commission-)からジープがやつて来て、授業中であるにも拘らず、原爆投下時広島市内に居た友達が、何人か連れて行かれました。帰って来た友達に「何があつたん?」と聞くと、「血を採られた」その手には、ハーシーのチョコレートが握られていました。

70年以上前のこと、想い出すまま書き綴りました。

2月7日はお天気に恵まれ、26名の参加者で都庁見学会が催された。集合場所の第一本庁舎入口にある「東京観光情報センター」には、各国の旅行者用にトラベルガイドや地図が用意されていて大変便利である。別棟の都議会議事堂に移動後、ガイドさんから都議の人数や都の予算などについて説明を受け、7階の本会議場へ。年々で残念ながら傍聴は叶わなかった。議場内部は楕円形のすり鉢型で天井が高く、鎌倉の大仏がすっぽり入るほどゆつたりしている。自然光の入る落ち着いた雰囲気。127の議席とそれを囲んで333の傍聴席がある。厳粛な気分になったところで、再び広場に出ると、東京2020のロゴや可愛いマスコットを描いたフラッグが目に入り、オリンピック・パラリンピックへの気分を盛り上げてくれる。第一本庁舎に戻りエレベーターで一気に45階展望室へ。晴れていれば見えるはずの富士山を想像しつつ眼下のビル群の眺めを楽しみ、同じ階のレストランでゆつくりランチをいただいた。解散後は希望者で損保ジャパン興和美術館に寄り、新進作家の絵画やゴッホの「ひまわり」等を鑑賞した。

(支部委員 河井尚子)

## 2018年度

## 東京支部奨学事業報告

## 東京支部チャレンジ奨学生報告

東京支部国内奨学金(通称チャレンジ奨学金)は、2年以上の就労経験後に大学に学ぶ3年生1名を支援する奨学事業です。奨学金は20万円です。今年度の応募者は3名で、いずれも意欲的に学ぶ姿勢には、甲乙付けがたく委員一同悩みましたが、実践的活躍を期待して増山翔子さん(慶應義塾大学看護医療学部3年)を選びました。4月6日の支部総会において、皆さまにご紹介します。

増山さんは法政大学現代福祉学部を卒業後、4年間株式会社コロコ発達療育センターで、発達障害児やその家族に療育指導をしてきました。その間に、より充実した支援のためには、医療、教育、福祉などの総合的な支援体制が必要と考え、慶應義塾大学看護医療学部に入學しました。また独学で保育士の資格も取得しています。現在は病院などの臨床実習を通して医療的な知識や技術を身に付けながら、平行して子どもの福祉や母子支援のあり方などを学び、卒業後は、総合的に障害児をサポートするエキスパートになりたいと頑張っています。

(1ページに増山翔子さんの写真を掲載)

## 東京支部国際奨学生報告

東京支部国際奨学金は、日本以外の国籍を持ち、その国の高等教育機関で学ぶ女性2名に、年額4万円を正規の卒業まで支給するものです。日本側の紹介者と奨学生が直接連絡できることを条件として、奨学生との交流も心掛けています。今年度は、フィリピンのレンリン・パンドン・サプルさんとミャンマーのサル・ギー・ムーさん(Naw Hsar Gay Mue 前号までのナウ・サル・ガイ・ムーさん訂正 ナウはカレン族のミスという意味)を支援しています。二人の近況を報告します。

## 【レンリン・パンドン・サプルさん】

日本側の紹介者は、NPO法人「ビラインの医療と自立を支える会」の山崎登美子さんです。レンリンさんは、3月卒業に向けて、ソーシャルワーカーとしての様々な実習に取り組んでいます。



レンリンさん

## 【サル・ギー・ムーさん】

## 日本側紹介者向後紀代美会員の報告

2018年10月23日、ヤングゴン・ミンマーの奨学生のサル・ギー・ムーさんに会い、奨学金を手渡しました。奨

学金は、東京支部が準備くださった素敵な祝儀袋に入れ、飾りの水引の説明もしました。そうしたら後にホテルの部屋で見たNHK国際放送で日本文化紹介をやっていた、同じ鶴の水引の祝儀袋の映像がでてきました。おかげで単にお金を渡すだけでなく、日本文化を知ってもらう良い機会にもなりました。

今回も仲介連絡と通訳をモン・モン・タンさん(Dr.Maung Maung Thun)が引き受けてくださいました。

彼は横浜国大で環境博士号をとられ、その奨学金を私の関係しているNGOが出した関係で、奥様お子さんも含めた長い付き合いです。それで昼食を奨学生とその妹さん(中学生)、同居先の叔父さんと三十年来の他の友人家族も交えて共にしました。場所は、独立の英雄アウン・サン將軍(スーチーさんの父)の事務所をレストランにした由緒あるところ。壁の写真や執務した机などを見学しながら、近況を聞きました。奨学生は20歳の大学3年生。昨年より英語が上達し、都会にも慣れて自信がでてきたようでした。日本語を習いたいとその方法も聞いていました。最近、期末試験が終わり、その結果待ちだそうです。3年生修了の証明書を英訳して送ってもらおうと頼みました。(3月にWest Yangon University 3年を修了の証明書が届いた。編集者)イラワジ河口の小さな村から大学に入ったのは、彼女だけだそうです。大学で学んでいる専門(工業化学)をいかに就職先がなく悩んで

いるとも話していました。最後に、「将来社会に貢献できる人になれるようがんばります」と言われたのが印象的でした。



サルさんと向後会員

## JAUW国内奨学生について

本部の国内奨学生の募集と一次選考は、各支部に一任されています。東京支部では、6月に募集書類を54大学へ送付しました。8月末の締め切りには、16大学から18名(一般奨学生10名・社会福祉奨学生4名・安井医学奨学生4名)の応募がありました。一般は支部選考委員の選考を経て5名を、社会福祉と安井医学は全員を、支部推薦応募者として、本部へ提出しました。本部選考と理事会承認を経て、東京支部からは、次の6名が奨学生と決定しました。

詳細は本部会報をご参照ください。

- ・ホームズ奨学生 宮崎彩
- ・一般奨学生 赤瀬歩

- ・社会福祉奨学生 稲岡紗也
- ・社会福祉奨学生 藤吉乙羽

(支部委員 坂上栄美子)



講演会報告

「黄春明が描いた台湾社会と女性たち」

一皆様のご支援をいただいております

講師 木下佳奈さん

2017年度ホームズ・社会福祉奨学生、木下佳奈さんの講演会が、2018年9月18日、東京支部と社会福祉委員会との共催で津田塾大学千駄ヶ谷キャンパス会議室にて開催され、参加者は43名であった。

「黄春明が描いた台湾社会と女性たち」をテーマに代表的作品を紹介するとともに、1960年代〜70年代の台湾社会と世界との関係の中で繰り広げられた女性たちの生き方、それら女性生き方に象徴された苦悩と希望、女性のアイデンティティの揺らぎと社会との関わりなどについて分析を行い、作品が象徴する世界観を炙り出し、聞く者に深い感動をもたらした。

テーマの選択は、台湾大学での日本語研修プログラムに参加し、彼の作品に偶然出会ったのがきっかけであった。紹介された作品、『海を見つめる日』と『小寡婦』は、それぞれ時代背景が異なるが、主人公は共に貧しい階層出身の性産業に従事する女性である。時代に翻弄され、苦しいながらもそれぞれの立場で希望を掴もうとする姿が描かれている。

前者は伝統的な農村社会へ帰還し、女性としての役割を果たし、地域社会へ貢献することで共同体に受け入れられ、淡いけれども将来へ向けての希望を持つ。近代化に伴い崩れつつある伝統的な社会の中で、人々が共感できる一つの理想的な農村を描いている。

後者は、米兵士たちへの接客を生涯としていた女性が主人公で、サ

ビス業の経営者、従事する女性、利用客である米兵の三者の視点から戦争とトラウマ、台湾と国際社会との関わりなどを描いている。都市に生活する現在の状況を脱却して帰るところを持たず、誰かと結びつくことで居場所を得ていくことが希望となっている。

障害者支援についても触れ、台湾や日本での経験として、ハード面より人的支援の重要性を強調された。

講演後の質疑応答では、特に女性の自立、生き方、職業としてのセックスワーカー、作家の生育背景等々について活発な意見交がなされた。

(社会福祉委員 遠藤理枝)



勉強会報告

「共生社会」の実現を目指して一性的マイノリティの視点から

講師 上川あやさん

12月12日(水)津田塾大学千駄ヶ谷キャンパス会議室にて開催された勉強会では、2018年度JAUW公開シンポジウムのテーマ「共生社会の創立」を性的マイノリティの視点から取り上げた。講師は2003年、日本で初めて性的マイノリティであることを公表の上、世田谷区議会議員選挙に当選、以来無所属で15年に亘り議員として性的問題に限らず多様な社会的少数者の人権確保環境改善に取り組んでこられた上川あやさん。(参加者23名)

幼い時から男の子であることに違和感を抱いていた上川さんは、大学卒業後27歳まで「男性サラリーマン」として生活を送った。しかし自分らしい性を模索した結果、心の性(性自認)と身体性の性を一致させるためシンガポールに渡り性別適合手術を受け、30歳で「女性」として生きるようになった。ところが、戸籍上の性別は変わらず「男性」。これが社会参加の最大の壁であることから、性別変更を可能とする特例法の立法運動に精力的に関わり、当選直後に特例が成立した。

政治家として活躍することを決めた背景には「社会が変わらないと生きづらい人がいる。黙っている人の痛みには人はいかに気づけない。だから声をあげ、まず近づいてゆくべきは私たちの方だ」という思い。また少数派の人々の生きづらさを解消するためには多数派を前提にした制度法律を見直すことが必要で、そのためには政策決定の場に身を置くことが重要だと認識された。議員にならなければ日本では初めて渋谷区と世田谷区で同時にスタートした同性パートナーシップ制度の創設に関わった他、2018年日本で初めて民族・国籍差別を禁止した世田谷区条例の成立にも関わった。

性の多様性と社会状況環境の概説ではLGBT+レズビアン(女性同性愛者)、ゲイ(男性同性愛者)、バイセクシュアル(両性愛者)、トランスジェンダー(体と心の性が違う人)の説明から入り、性にまつわる「常識

の嘘(身体の性は男と女に割り切れる、心と体の性は一致して当然異性に惹かれることが当たり前)をひもとき、さらに性的マイノリティの取り扱いの変遷、日本と他の先進国との比較、国の施策など言及された。最後に世田谷区を取り組み、公的文書の不要な性別欄の削除、性の多様性を各教科の学習内容に取り入れる、性別を問わないトイレ整備の推進などが紹介された。

一人の参加者が言われたように「目からウロコがいったい落ちた」話だった。見えなかった問題や悩みを可視化、解決に向けて活躍する上川さんから、日常生活の中で多数派の生き方、価値観、常識が「普通・当たり前・正しい」と思い込み、逆に少数派が「異常・だめ・決めつけずらあゆむことを見直す習慣の大切さ、そして、性的マイノリティに関わる問題は人権問題であり、一人ひとりが関心を持つべきことだと改めて実感させられた。

(支部委員 藤村久美子)



## 新春のつどい

## 奨学生のスピーチに感動

1月12日、京王プラザホテルで新春のつどいが開催され、第一部で国内奨学金贈呈式が行われた。奨学生の熱意溢れるスピーチを聴き、将来、日本のそして世界のリーダーになって活躍されることへの期待が膨らんだ。(詳細はJAUW会報266号に掲載)奨学生からは、緊張の中にも、この機会を大変喜んでいただき、国内奨学事業を長く継続してきたことを意義深く思った。第2部の懇親会では、全国から駆けつけた会員と久しぶりに交流を深め、心づくしのランチを華やいだ雰囲気の中で味わった。かつての奨学生が同席の新奨学生と和やかに語る風景も見られ、共に新春の一日を楽しむことができた。



ホームズ奨学生 宮崎彩さんのスピーチ



一般奨学生 陳璐さん(左から二人目) 懇親会のテーブルで

## フラワーアレンジメント講習会

西向みち子

12月3日、JAUW 事務所会議室にて河井尚子講師のご指導によるフラワーアレンジメント講習会に参加しました。この季節は街のクリスマス飾りが目を引きまします。心待ちにしていた受講でした。花材はモミヤヒムロ、ブルーアイ、バラ等々、香りも爽やかです。先生の丁寧な指導の下に皆熱心に手を動かしました。楽しいひと時は瞬く間に過ぎ、参加者全員が見事な作品を完成させました。素敵な仕上がりに大満足、家族にも大好評でした。花材を替えて水引きを用いるとお正月飾りにも応用できるとのアドバイスもいただきました。誠にありがとうございました!!



## サークル案内

## ● 源氏物語を読む会(Ⅱ)

第三・第四火曜日

午前十時半～十二時

津田塾大学千駄ヶ谷キャンパス会議室

講師・坂上栄美子会員

連絡先・中山律子

☎(03)3336-4628

「常夏」を再読しています。

## ● 源氏物語を読む会(Ⅲ)

第二・第三水曜日

午前十時半～十二時

津田塾大学千駄ヶ谷キャンパス会議室

講師・坂上栄美子会員

連絡先・河井尚子

☎(03)3720-0293

「初音」を読んでいます。

## ● 水墨画教室

第二木曜日

午後一時半～三時半

JAUW事務所会議室

講師・日高絹子(絹紅)会員

連絡先・森川淳子

☎(045)583-3430

## 2018年度 東京支部新入会員

植田 奈穂美 (上智大学)

鳥養 映子 (お茶の水女子大学)

長野 文子 (東京女子大学)

藤本 圭子 (早稲田大学)

(広島支部から移動)

馬 立栄 (大連理工大学院)

三木 谷理香 (慶応義塾大学)

山下 順子 (津田塾大学)

劉 瑛 (大連理工大学)

\*敬称略 \*50音順 括弧内は出身校

## 東京支部新委員の紹介

長谷川 瑞穂

よろしくお願いします

## ご寄付いただきました

ありがとうございます

源氏物語を読む会(Ⅱ) 一万円

源氏物語を読む会(Ⅲ) 一万円

水墨画教室 五千元

\*敬称略

## 支部からの連絡

● 住所等の変更はお知らせください。  
● 会費未納の方は早目にお願ひします。  
● 91歳以上の会員の会費は免除することがあります。支部長までお申し出ください。

● 中野区視覚障害者福祉協会支援のため使用済み切手を事務所までお送りください。

## 《編集後記》

たくさんの方々のご協力をいただき、ともしび65号を無事に発行することができました。心より感謝申し上げます。これからも随時、投稿をお待ちします。ともしびを通して東京支部の活動をお伝えできれば幸いです。

(編集担当 桑折・進士&amp;嶋田)

ともしび 第65号 発行日：2019年3月4日

編集/発行：一般社団法人大学女性協会東京支部 〒160-0017 東京都新宿区左門町11番地6-101

Tel: 03-3358-2882 Fax: 03-3358-2889 Email: jauw@jauw.org URL: http://www.jauw.org

制作協力/印刷：株式会社 繁松

※「ともしび」は会員のための情報誌です。外部に向けた転載、引用などは事務所までご一報ください。